

セミの諺

—古代ギリシアの場合—

水谷 智洋

2000年7月の研究発表会で、浮田三郎先生が「ギリシアの諺と文化」と題する講演をされました。お話そのものは、例によって、きわめて興味深いものでありましたが、私の愛する昆虫のセミの出番が少なく、予想外でした。(あとで講演者にその旨を告げますと、すべては matrix の選び方によるというお返事で、さもありませんと頷かれました。) そこで私は思い立って、古代ギリシアのセミの諺をさがしてみました。と言いましても、何をもって諺とするのかの判断は困難なことが多いので、その点は Erasmus の権威によりかかるとし、彼の *Adagia*¹⁾ から採ってみました。以下はその御報告ですが、その数は決して多いとは言えず、これまた予想外ではありました。

1) τέττιξ μὲν τέττιγι φίλος, μύρμακι δὲ μύρμαξ. (1.2.24)²⁾

セミはセミの、アリはアリの友。

アリストテレース『ニーコマコス倫理学』第9巻第3章(1165b)にある τὸ ὅμοιον τῷ ὁμοίῳ φίλον 「似たものが似たものの友」の一具体例というところ。出典は前3世紀の詩人テオクリトス Theokritos の『牧歌』*Eidyllion* 9.31。ただし、31行は文章として完結しているのではなく、「また、タカはタカの友。けれども私の友はムーサと詩歌。」という32行とで一文をなすのですが、諺としては上記で充分なのでしょう。ところで、Erasmus は、'Porro nota est formicarum politia, et cicadarum concentus.' とコメントしていますから、どこかで一匹のセミが鳴き始めると、負けじと何匹ものセミが、日本でなら、ジージー、シャーシャーと、かの国でなら、つつましやかに、ミンミン、ジィジィと、鳴きたてる様を想起してよいのでしょうか。

2) 'Ακάθιος τέττιξ. (1.5.14)

アカントスのセミ

アカントス Akanthos はカルキディケー Khalkidike の町。ビュザンティオンのステパノス Stephanos (6世紀) の記述 (s.v. *Ακανθος (i.57 Meineke)) に、前5~6世紀の抒情詩人シモーニデース Simonides の詩句 (fr. 610)³⁾ にあるように、アカントスのセミは鳴かないところから、口のきけない人のことを言う諺、とあります。鳴かないセミというのは、まったく面白みがありませんが、W. Pape und G. Benseler, *Wörterbuch der griechischen Eigennamen* (Braunschweig, 1911, repr. Graz, 1959) s.v. *Ακανθος に、「足の速い犬」を指す 'Ακάθιος κύων なる諺が紹介されていますから、ここは諺になりやすい土地柄であったのかもしれませんが。

3) τέττιγι τὴν μέλιτταν συγκρίνεις. (1.8.75)

ミツバチをセミと比べる。

2世紀の著述家ルーキアーノス Lukianos の『雄弁術の教師』*Rhētorōn Didaskalos* 13 に、「ラッパが笛を、セミがミツバチを、合唱隊が指揮者を音量で打ち負かす程に ... 」という語句が見えますが、この諺が、上記のような形で、誰かの著作に出るのかは詳らかにしません。'Nam cicada cum major, tum canora, cum apis sit non modo minuto corpusculo, verum etiam pene muta.' が Erasmus のコメントです。

4) τέττιγα πτεροῦ συνείληφας. (1.9.38)

セミの羽根をつかんだ。

出典は前7世紀頃の抒情詩人アルキロコス Arkhilokhos fr. 143 Bergk⁴⁾。ルーキアーノス『思い違いをした批評家』*Pseudologistēs* 1 に、アルキロコスがある人から悪罵されたとき、詩人は自らをセミになぞらえて、「おまえはセミの羽根をつかんだのだ、それでなくてもやかましいセミが、一段と声をはりあげて鳴くだろうよ。」と言いつ返したとあります。わが国で言う「虎の尾を踏む」や、「虎の口に手を入れる」に当たります。

5) τέττιγος εὐφωνότερος (1.9.100)

セミより声うるわしい。

これも、3) と同じく、このままの形で誰かの著作に出るのか詳らかにしません
が、Erasmus は、テオクリトス『牧歌』1.148 の「あなたの歌はセミをしのぐ。」
を引いています。

5) -A λαλεῖν τέττιξ.

おしゃべりならセミ（も同然）。

これは5) の記事中に見えるもので、Erasmus から独立の番号を与えられては
いませんが、Liddell-Scott-Jones の『希英辞典』の τέττιξ の項に proverb として
引かれていますので、挙げておきます。出典は前 4 世紀の喜劇詩人アリストポー
ン Aristophon fr. 10 (Kock. ii.280) の「(彼は) 酷暑に耐え、真昼のおしゃべり
にかけてはセミだ。」で、アテーナイオス Athenaios 『宴席の学者たち』
Deipnosophistai (6. 238d) に引かれています。

6) τεττίγων ἀνάμεστοι. (3.3.95)

セミでいっぱいの人々（＝旧弊な考えを固守する人々）。

ここでの「セミ」は Liddell-Scott-Jones の『希英辞典』の τέττιξ および τεττιγο-
φόρας の項の説明によれば、「特にアッティカ地方で古く用いられた黄金の髪
飾り」のことで、それは、「彼らが土着の人間 αὐτόχθονες であることとし
るしとして髪に飾った」ものの由です。そこから、アリストパネース『雲』984 行の
ἀρχαία γε καὶ Διπολώδη καὶ τεττίγων ἀνάμεστα 「いやはや、古色蒼然、今はす
たった昔の祭礼を思わせるものばかりだ、ちょんまげ留めのかざりやら」（田
中美知太郎訳）となるわけです。

7) (?) οἱ τέττιγες ἑαυτοῖς χαμόθεν ἄσονται. (5.1.75)

セミは自らのために地面から鳴くだろう。

出典は、アリストテレース『修辞学』第 2 巻第 21 章 (1394b-1395a) の「そうい
う場合には、ラコーニア風の警句や謎めいた言い方が適当である。たとえば、
『セミが地面から鳴くことにならぬよう、無法な行いをしてはならない』とステ
ーシコロスがロクリス人に述べた発言を引くときのように。」「セミが地面か
ら鳴く」とは、樹木が切り倒されてしまえば、セミは地面で鳴く他はなくなると

の意味と解されます。とはいえ、ここに見える前 6 世紀の抒情詩人ステーシコロス Stesikhoros の詩句⁵⁾には *ἐαυτοῖς* がなく、全体も「謎めいた言い方」ではあっても、諷らしくありません。どうやら、Erasmus の側になにか思い違いがあったもののようです⁶⁾。

注

1) D. Erasmus, *Adagia* (ed. prima, 1500, ed. secunda, 1508). ここでは Desiderii Erasmi Rotterodami Opera Omnia (Leiden, 1703, repr. Hildesheim, 1961) の Tomus secundus complectens *Adagia* によりました。これは、むろん、1508 年の改訂増補版をおさめたものです。

2) 1.2.24 という数字は、原著の 'Chiliadis primae centuria secunda. Proverbium XXIV' を指します。以下同様。ちなみに、*Adagio* (第 2 版) には 1.1.1 から 5.2.51 まで、全部で 4,150 の「諺」が収められています。なぜか、1.1.100 がないので 4,151 にはなりません。

3) この断片番号は D.L. Page, *Further Greek Epigrams* (Cambridge, 1981) のそれ。D. A. Campbell, *Greek Lyric*, Vol. III (The Loeb Classical Library, 1991) も同じ番号を用いています。

4) M.L. West, *Iambi et Elegi Graeci*, Vol. I (Oxford, 1971) は、この断片を τέππλος ἐδράξω πτεροῦ の形で収め、223 の番号を与えています。むろん、こちらのほうが適切です。

5) D.L. Page, *Poetae Melici Graeci* (Oxford, 1962) の通し番号では fr. 281 (b)、詩人別では fr. 104 (b)。Campbell, *Greek Lyric*, Vol. III では Testimonia 17。

6) この項には、H. Stephanus が Erasmus の誤解を指摘する少々長い注を付しています。